

目的 疫学的調査において、食塩摂取量の増加は高血圧の頻度を高めることが明らかにされてきた。しかし塩分摂取と血圧との関連性を個人レベルで考えると、塩分負荷あるいは塩分摂取量の制限は必ずしも共通した血圧に対する反応を示すものではなく、食塩に感受性を示す高血圧と感受性を示さない高血圧もみられる。高血圧の素因のあると思われる人、また血中カテコラミンに対する昇圧反応がみられる人などについて、食塩摂取による反応を明らかにすることを目的として調査および研究を行った。

方法 山村部および長寿郷として有名な広島県御調郡立花を中心とした地区、また漁村などの人々を対象として調査した。血液の分析および血圧測定は通常行われている方法で行った。カテコラミンについてはTHI法により測定した。

結果 1. 長寿郷立花の健康長寿者(90才以上)においては、従来食塩摂取量が少なく、また血圧は若い世代の血圧を維持していることがわかった。 2. 山村部における食塩摂取量の多い食生活者の中には高血圧者が多く、境界高血圧の人が高血圧に移動する状態がみられた。しかし、食塩の尿中排泄されると推定される人には高血圧発症のみられないことがわかった。 3. 血中アドレナリンなどの比較的多い人は、食塩による昇圧促進がみられた。 4. 漁村などでタンパク摂取量の多い人は、食塩摂取量が多くても昇圧を抑制する何らかの機構が働いていると考えられる知見を得た。